

孵らずの卵

羽澄

日曜だ。午前は山でクワつみをした。つんだクワを籠に入れ、んっしよって何度も往復した。おら、山ではたらくの好きだし、日曜はできるだけおつかあに楽をさせる。弟の留はしきりにもぐらの上げ土を掘りかえしている。聞く、ぬしを一目見てやろうとしているらしいが、つかまりっこねい。昼めしのとのおつかあが、「勉強がなかったら、家仕事はいいからどこへでも遊びに行きな」と言った。ないどころではなく、精神衛生上、有害すぎるほどたまっているが、健康第一だ。

というわけでおらはもちろん川へ来た。カジカがうんと居るはずだ。おもしろいように取れるだろう。こいつは、甘く煮るとうんとうまいし、メジロのえさとして売ると、高値がつくんだ。

赤いくつ アンポイオイ

白いくつ ペイポイオイ

山サル ライソンカウ……

「あなた、だあれ」

引き揚げ前に住んでいた宜蘭ぎらんの唄をうたいながら、釣り糸を垂らしていると、いきなり声をかけられた。

誰かからあなたなんて呼びかけられたことなんてねっし、あんまり透きとおったきれいな声だったもんだから、どぎまぎしてだまっていると、向こうから近づいてきた。おら、目んたま丸くなった。村の掲示板に貼りだしてある文化啓発ポスターの何某なにがしとかいう女優にそっくりだったんだ。

「ね、この村のひとよね」

あわててうなずくと、女優何某は、にっこり笑って、

「あたし、初枝はつえだしおり。ここへ越してきたの。よろしくね。あなたは？」

「な、夏目栄治なつめえいじ」

ばつが悪くてうつつむいているおらを尻目に、乗ってきたバケツを覗きこむやいなや「カジカでねっか！」と大声で叫んだもんだから力抜けちまった。

「なんだい、普段はそっちかい。そんなら、なしてあなた、なんてまちみたいな言葉」

「乗ってきたトラクターのラジオで聞いたんだべやー」

葉は頭をぼりぼりとかいた。おら、おかしくって笑っちゃった。

「なあな、カジカってどうやって釣るのか？」

「教えてやるよ。まず……」

そうしておらたち、友だちになった。

・・*

月曜、おらは学校へ行った。おらたち東組は動物園といわれるくらいうるせいが、授業となると、途端にびたりと静かになっちゃう。おらたち、さっぱりわからねいんだ。

言い訳するならつい最近まで芋掘りばかりやらされてたから、きそがなつてないんだ。指で足りているうちはまだいい。それ以上になると、頭の中でニジューカケルサンジュウロクだのサンビヤクロクジュウサンワルサンだのエックスニジューカケルワイサンジョウウなんて魔法の呪文でちんぷんかんぷんだ。そんなおらたちを見て先生はため息ついて、教壇へ突っ伏してしまふ。あとは用務員が鐘を鳴らしに来るまで、日露戦争のとき村のじさまたちが植えたクス

ノキを見てぼうっとすごす。

ところがその日は違う。葉だ。葉が全部答えちまう。分厚い教科書の隅から隅まで質問されても、お茶の子さいさい、もしかして葉は魔法使いか何かなんだろうか。エックスやらワイやら飛び交う教室で、おらは呆然としちまった。それは先生も同じだったらしい。目を白黒させて、最後にはいつものように教壇へ突っ伏しちまった。

鐘が鳴ると、おらの遊び友だちは、みいんな葉のところへ集まった。美人の転校生というだけでめずらしいのに、難しい問題を魔法使いみたいに解いちまうから、よけいだ。

「そんな恰好がいいのは、おっとうかおっかあが毛唐の人なのかえ？」なんて女どもはずけずけと尋ねるけど葉は親切に答えてやるんだ。ふと目が合うと葉はにっこり笑ってこっちに来た。

「栄ちゃん」

皆、おらと呼ぶときはそうだ。もちろん下の学年の留のダチ公も。けど葉に言われるとなんだか耳がこそばゆい。でも「やめろ」なんて口にしたら、かなしむかもしれねい

から、おら、腹に力入れてぐつとこらえた。

「栄ちゃん、引き揚げ前は宜蘭に住んでたんだってね」

「うん」

「その頃は どうしてたのけ」

「どうしたもこうしたもねえ。おつとうは山に柴刈り、おつかあは川で洗濯さ」

「へえ、栄ちゃんは桃太郎さんだったのけ」

「そうよ、今に何か流れてこねえかと待ってた」

教室の隅に置いてある、この間進駐軍がくれた缶詰を指さすと、なぜかツボに入ったらしくげたげた笑う。

「ああ、栄ちゃんはじじいだったかえ」

「へへっ」

「仲の良い友だちなんていなかったのけ」

「たくさん。一番仲良かったのは玉ユキだな」

「玉？ へえ、向こうのひとかね」

「んだ。いい奴ですよ、次高山に遊びに行くときはいつもついてきてよ、背が低いくせに木登り得意なもんで、よく山鳥の巣から卵かつぱらって二人して食べた」

そしたら葉は妙に切なそうな顔して「卵かあ、最後に食

べたのいっだろう」なんてうつむいた。あまりのかなしみように、おらが思わず「安心せい、取ってきてやるよ」と胸を叩くと、「本当かえー」と、飛び上がるような勢いでぱつと顔を上げて、いきなり肩掴んだ。おらびつくらこいて、払いのけちまった。嫁入り前の女が、そんなことするもんでねえ。肝心の葉はといえぱいっこうに気にしていないよ、うで、ずつとはしゃいでやがる。

「玉ちゃんの話、ゆかいだな。もう少し聞かせて」

「ん、おら、川に弁当袋落としたことあってよ、この前の水害で死んじまった姉やんのさ、がりなんだがよ、赤いやつ。女みてえ、ってよくからかわれたが、ともかくおら、おつかあが怒るのが怖くってよ、必死に追いかけたんだが、水の流れが追いつけなくて、それを拾ってくれたのが玉よ」

「玉ちゃん、足はやいなあ」

感心してうなづく葉に、

「ちがう。玉は裏口から先回りして流れてくる弁当袋をうまい具合に、ぼうきれでひよいっと、取ってくれたんだ。おかげでおら、おつかあに怒られずにすんでよ」

「んまあ」

「かわいい妹みたいなんだったから、こっちに引き揚げるとき、玉蘭を忘れないでって散々泣いてよ。あれはほんと困ったべい」

「女の子なのけ……」

そう言ったきり、葉は黙ってしまった。それっきり、おらがどんな話をして、子どもが外へゴム飛びに誘っても、葉は黙ったままだった。わけがわからぬい。

けど放課後、おらが弟の留と一緒に川遊びしよう誘うと、喜んでついてきて、意外と上手くカジカを釣った。おまけに家から持ってきた鍋で甘く煮て、おらたちだけじゃなく、次の日学校で組の皆に配ったもんだから、たちまち人気者になった。それから葉やい葉やいなんて子どもがうるさいから、あまり声がかけれぬい。けど、学校が終わったあとは変わらず川で遊んでいたから、おらたちは変わらずうつと友だちだった。

* * *

しばらく経ったあるとき、留と山へクス取りに行くと、

なぜか葉が座りこんで泣いていた。こんな山の中でどうもおかしい。近づくと、ぶんと嫌なおいがして、おらびんときた。

「栄ちゃん、どうしよう。手、洗いたい。石鹸ないのけ」

「そんなものここにはぬい。おお、わるくせい風がくる。

葉、カワセミにいたずらしたろう」

つづけて、

「手動かすとよけいくせい。カワセミの巣はけっしてかまっちゃなんぬえだ。おら、こんなおしとやかだが」

そこまで言うと、葉はけたけた声を立てて笑った。

「なんぬ、栄ちゃんそんなこと言って」

「だまって聞けい。引き揚げたばかしのとき、おら、留と一緒に崖にカワセミの巣を見つけてよ、足場がわるいんでおつかなくて行けぬい、そんでおら、手を突っこんだ。手を抜いたら目がくらくらして崖から落ちて、けついためた。けつのほうは無事だったが、家に帰ってからがいけぬい。

くせいってんで、めしなんか外で食わされた。ダチ公どもにからかわれてきまりがわるいつたらぬい。こりこりした」

「いやな栄ちゃん」

「くせいやい、近づくな」

「ふふふ」

そう言っても、葉はけたけた笑ってふざけるばかりでちがあかねい。しかたないから、おら、留と一緒に葉の手を引いてある場所に連れて行った。

「石鹸よりいいものがある」

おら、葉をおらの家の灰置場に立たせて、留におっかが煮炊きを使うなべを持ってこさせた。

「何をする」

「くせいのを取るには、火をもした灰が一番だ。それつけて洗ってみな。少し前はどの家でも灰を水がめに入れて、その上澄みで洗濯してたんだ」

「へえ」

半信半疑の葉の手をなべに突っこみ、留と一緒に灰を入れてごしごしと洗った。しばらくするとねばねばしたカワセミのくそが取れて、においはいくらかましになった。

「ありがとう、栄ちゃん、留ちゃん」

めずらしく深々と頭を下げる葉を見ると、何だかきまりが悪くなっちまって、「どうも」なんてらしくない返事

をしちまった。留の野郎ときたら、後から散々おらをからかいやがった。まあ、おらもお返しに落ちてたばふんを投げつけてやったから、どっちもどっちとする。

でもそれからいけなかった。その晩、味噌汁を作ったおっかが「なんだかこの汁くせいやい」なんて言うんだ。だつてカワセミのくそを洗ったなべだ。思わず留と顔を見合わせちまった。んでも、おっとうが「いや、いつものよりおいしいだ」なんて言うから、おらたちとうとう吹き出しちまった。もちろんおっかあに散々に絞られて、とつくり反省した。

そんで、おら思い出したんだ。葉に卵を取ってきてやると約束したこと。すっかり忘れていた。だから葉の奴、慣れない崖登りなんかしやがって、カワセミの巢なんかに構ちちまった。わるいことしちまったかも知れぬい。

今度の日曜、ジネンジョ掘りが終わったら、葉におらの家のニワトリの卵をいくつか持って行ってやろう。今からよろこぶ顔が楽しみだ。

・・*

うちの卵は特別にうまい。おらの家は穀物を扱うから、米粒や皮が出る。夕べにトリどもを外に出すと、米粒を綺麗に拾って食べ、はきだめをひつかきまわし、マンジュウ虫やオケラを食べる。そしてじゅうぶん運動するから、おいしい卵が産めるといふ寸法だ。まちでは、小屋の中に小さな籠を二重にも三重にもして、トリを運動させないようにして、えさも化学の先生が作ったので飼うのが流行っている。こうして育った卵は、どこのも同じ味で、魚の嫌な味がするんだ。

「葉やい葉やい」

産みたてほやほやの卵をポケットに入れ、葉が身を寄せている金田のばあさまの家の戸をどンドン叩くと、もう真昼間だというのに寝ぼけまなこを出てきた。起きてから一度も髪を梳けずってねいんだらう。ヤマアラシみたいになつてやがる。きつとわるさをして遊んでいたにちがいない。おらを仲間に入れねいなんで水くせい奴だ。

「何してただ」

「勉強だ」

突きつけられた帳面にはびっしり数式が書きこんである

た。加えてちまちました字なもんだから、おらにはなにがなんだかさっぱりわからねい。

「葉、おめえ、休みの日も算数やってんのけ」

「んだ、当たり前だべい」

「いつもそうなのけ」

「栄ちゃんと遊んでないときはな」

おら、なんだか恐ろしくなった。まるで葉が別の生き物になつちまつたみたいだ。となり村に來た見世物小屋で蛇を吞んじまう姉やんを見物したときと同じふるえがくる。

「葉、おめえ、おかしいんじゃないのけ。村下の兄やんみたいに始末におえんくなつぞ」

復員した兄やんは、村一番の物知りで、松が谷の長老ですら一目置いてるすげえお方だ。なんでも大学を首席で卒業したとか、えらい先生から勲章をもらったとか、何かとうわさにかかかぬい。けども戦争中、大陸で色々あったらしく、肺を悪くして帰ってきてからは、とんと評判がわるい。最近協同組合で買った猟銃を山にこもって何を狩るわけでもなくぶつ放してるってんで、とても気味悪がられている。うちのおつかあに至っては、あれは気がふ

れた人間だとはつきり言っちゃまった。留は童話を読んでくれる兄やんが好きらしいが、おらはなんとなく気味がわるいってんで絶対に近づかぬいようにしている。

「何言ってる。これからの世の中で大事なのは勉強だ。今までは竹槍なんか振り回したり、芋掘ったりで無駄な時間すごしてたけども、そんなものおらたちを守ってくれるはずがぬい。真に身を助くのは学問だ」

「葉、どうした。えらい先生みたいなこと言い始めて」

「村下の兄やんのうちで新聞を読んだ。あんな人はけっして大陸でおかしくなったんじゃぬい。本当のことに気づいただけだ。先の戦争は日本が勝てるわけがなかったべ。勝てもせんに戦争をはじめやがって、きゆうだんせんとならぬ。おらのおっとうだってそう言うにちがいぬい」

「おっとう」

おらの言葉に、葉ははっと気づいたように目をぱちぱちさせた。葉のおっとうはまだ復員してぬい。もう戦争が終わってかなり経つというのに、帰って来ぬいもんだから、死んじまったどうわさするふときな奴も少なくなぬい。そういう奴を見つけては、おら、胸倉つかんで「葉のおっ

とうは生きて今に帰ってくる」って言い聞かせるようにしている。だって葉は友だちだ。友だちがかなしむようなことを言う奴はゆるしちゃおけぬい。葉はおっとうどころかおつかあも長崎の病院から帰っちゃやこぬいんだ。満州で災難に遭って孕んじまったって。これもただのうわさだ。うわさにすぎぬいのに、葉がいくらやめと云ったって、皆聞かぬい。それどころか、ますますひそひそやりやがる。おっとうとおつかあがいぬい、それがどうした。さすがのおらもそのうわさを何度も出す奴には、カジカやジネンジヨを分けてやんぬい。

「おっとうは満州で……」

葉はうつむいちゃまった。いつかおらが宜蘭の話をしたときと同じ、何を考えているのか知れぬい顔をしていた。けど今度はわけが違う。おらが原因を作っちゃまったことがはつきりしてた。頬をまだ冷たい山風がびしびし打つ。

「あ、葉、おら」

「なんてな！ 栄ちゃんの言う通り、おっとうは満州で生きてつよ。匪賊に気に入られて今頃お頭やつてるべい。なんも心配すつことぬっべ」

そんなことへらへら言うくせに、葉の頬には水がつつつている。だからおらは村で配られた衛生ハンケチを取り出した。女がそうしているのはあまり気持ちがいいものではない。ぬぐっている、葉は「いてえいてえ」と言いやがった。これでもやさしくしているのに、そんな奴にはこうだとばかりに力をこめると、しまいには笑い出した。

「栄ちゃんったらひどい奴。いてえいてえ」

「へへ、おもしろい面になったえ」

あわてた葉が井戸を覗くと、すっかり頬が赤くなったのが映った。

「栄ちゃん！」

しばらくおらたちがふざけまわっていると、うるささに堪忍袋の緒が切れた金田のばあさまが出てきて、箒で追っかけてきた。でもなにしろおらたちは風の子だ。ばあさまなんかにつかまえられるわけない。ひゅーひゅー言ってるばあさまを尻目におらたちは梅の木に登って様子をを見ていた。するとばあさまは「ああ、いやな日、いやな日。こんな日は蔵にある砂糖を舐めるにかぎるべい」とでっかいひとりごとをもらした。たちまちおらたちは素直ないこち

やんに戻り、秘蔵の一品をごちそうになることにした。

・・*

たまらなくうまい砂糖を、宝物のように指でつまんで舌で転がしていると、なぜだか葉は奥に引っこんじまった。

「葉」

「んだんだ、すぐ帰っから」

言葉通り、風神様もかくやの早さで戻ってきた。

「なんでえ、これ。魔術書なのけ」

葉が抱えていたのは恐ろしく分厚い本だった。昔はさぞかし立派な姿だったんだろう。表紙はきんきらに縁どられている。ただ、ところどころはげてて、題名に何が書いてあるのかさえまともに読めやしねい。

「ちがう。おらが満州で使ってた教科書だべい。引き揚げのときにこっそり持って帰ってきただよ……おらは半分まで進んだところ。凶解入りで栄ちゃんも楽しいだろう」

ばさりと開かれたページに、おらはたまらずめまいをおこした。楽しいはずがねい。字を見るだけでくらくらする

のに、わけのわからぬ数式つきの複雑な図なんて見たくもねい。なんせおら、いつかの夏に習ったオニヤンマの解剖図をおぼえておくだけで精いっぱいだ。

「栄ちゃんも今日からこれ勉強するだ」

なのに葉ときたらそんなことを言いやがる。

「そんなもの学校で先生が教えてくれる」

「自分たちできしつとやらないと、駄目だ」

そのまま手をぎゅうつと握られた。

「栄ちゃん、約束してける。わかんねいところがあつたら、おらが教えるから、一緒に勉強すべい」

一所懸命になりすぎて、爪が手の甲に食いこんでいる…

…ああ、でも。おらはこの痛みを知っている。去年の秋、水が来るといふのに、おらを逃がそうとして死んだ姉やんを最後に見たとき。おんなじふうにおらの手をぎゅうつとした。

——いきてけろ。

そういうとき女つてたいてい勝手なんだ。こちらの了解なしに自分の思いを押しつけてきやがる。けんど、けんど……。

「……おう」

「約束だべ、栄ちゃん」

小指と小指がぶつかって、それがなぜだかおかしい。また笑つちまった。

「早速はじめるべい」

「げ。勘弁しろい、明日からだ」

葉はぎやあぎやあ言つていたが、つかまらねいうちにおらはズックを履いて外へ飛び出した。

「カジカ釣りならいくらでもつきあうだ」

「ばか、おらはこれからきつね様にあぶらげをおそなえしに行くんだ」

そうしておらが何か言う前に、葉は奥へ行つちまった。

きつね様というと裏道にぼつんとあるおいなりのことか。そういうえばもうすぐ初午か。おらも初午のまつりはいろんな店が出るから大好きだが、おいなりそのものには興味がない。ということは葉の奴、意外と信心深いのかも知れねいな。

外へ出ると、お天道様が灰色の雲に隠されちまつていた。いけねい、あれは雨を降らす雲だ。早く帰って、洗濯物を

取りこむ手伝いをしねいと。

走り出そうとしたおらに、誰かが声をかけた。振り向くと、鍬を担いだ金田のばあさまだった。ちょうど畑仕事を終えたところらしい。おらはこのばあさまが少々苦手だ。なぜって、話が長い。一度つかまるとなかなか家に帰してもらえねいんだ。だから今日は先手を打つ。

「ばあさま、おら、洗濯物を取りこまなきやなんねいんだ」「んまあ、おつかあの手伝いをするなんて感心な。いつからそんなしゅしよ、な子になったねや」

「昔からだ」

おらがそう言うと、ばあさまはからからと笑った。ひでえこった。すかさずスキをつけて帰ろうとしたが、そううまくはいかぬい、いきなり腕を引つ掴まれた。

「いてえいてえ、何をするだ」

「栄治、葉はなあ、とにかくええ子だつべ。よく気がつくし、おらの家の掃除もかせねい、何よりきつね様に毎日お参りするような奇特な子、おらは久しく見たことねい」

「……葉はそんな毎日何を祈ってるだ？」

「たくさんだ。『おつとうがおつかあが帰ってきますすよう

金田のばあさま

に』『おらのリウマチが治りますように』『学校みんなが楽しくすごせますように』……あの子は自分の事なんか一つも願わねい、全部他人様のために祈ってるだ。あの子は心の底からきれいな子なんだろうな」

ちようどあぶらげを煮はじめたのだろう。醤油のいいにおいが、ぶんとただよってきて、腹が、ぐうと鳴った。

「料理だって上手いんだ。きつと、いい嫁になるぞ。どうだ、栄治。栄治の目から見た葉は」

「変なこと言わねいでくれ、ばあさま。おらたち友だちだ」「……ともかく葉と仲良くしてやってける」

「当然だ、心配するねい」

「こりや余計なお世話だったがや」

ひやつひやつひやとばあさまは笑い、やがて少しふらつきながら去っていった。小さな影が無事家の中に消えていくのを見届けてから帰ろうとして、おらは気づいた……葉に卵を渡しそびれちまった。ポケットの中に手を突っこんでみると、ほかほかだったのに、死んじまったみたいに冷えきつちまっている。こうなってはしかたねい。葉にはできただけうまい卵を食べさせてやりたいもの。

おらは卵を取り出すと、親指でひびを作つてそこからつるりと喉に流しこんだ。ああ、うめえ。これはこれで極楽だ。

・・*

次の放課後から猛特訓がはじまつた。何が何だかわかんねいとぶつくさ言つていたおらだが、栗の教え方が抜群にうまいおかげでなんとか見こみがつきそうだ。

最初の特訓からずいぶん経つた今では、留も一緒に栗先生の家を集まつてお世話になつてゐる。

「エックスをこつちに代入するだよ」

「う？」

「ワイが出たらゼットも出るから、そこでさっきの式を使うこと」

「んん？」

留が答える番だが、ついでにおらも解いてゐる。一冊の帳面を留と半分ずつ使うのは、ちまちましていてやりにくいがしかたがねい。昨日習つたばかりの数式を帳面に書き

つけていくと、それらしい数字は出た。

「留ちゃん、できたか？」

栗が聞いているというのに、留ときたら目をそらして答えようとしねい。肩をつつくと「兄やんが言え」とこすず、るいことを言う。ええい、らちがあかねい。おらは帳面を留から奪い取つて栗へ突きつけた。

栗は赤鉛筆片手にしばらく無言で帳面を見つめていたが、やがて真面目な顔になつて、留の方のページに小さく三角をつけた。留がやつちまつたという表情を浮かべると、すぐに栗の解説がはじまつた。おらは近くを飛んでいるコジユケイの親子に夢中で気もそぞろだったが、適当に聞いてもわかりやすい説明だということは伝わってくる。どうして間違つたのかをしっかりと教えてくれるから、次に間違えることがなくなるんだ。

「でも途中までは合っているから、そんなに気にやまなくて大丈夫だつべ」

栗は留の頭を撫でて、ごほうびとしてカジカの煮つけたのを差し出した。途端に神妙な面持ちだった留の顔がぱつと輝く。栗は間違えたってけつしてくさしたりしねい。そ

ういうところが学校の先生と違うから、どんどんやる気がわいてくるんだ。

自分の番が終わったので、留は帳面を放り出してコジユケイを構いに外へ飛び出して行った。げんきんな奴だ。

「はは、見ろよ葉。留の奴、肥溜めに落ちてやがる」

葉の家の本道から二百メートルほどいったところに大きなスギやいろんな木でうすぐらくなっているところがある。よくコジユケイやメジロのような小鳥が巣を作るんだが、金田のばあさまが無理矢理作った畑もあるからいけねい。肥溜めが罠のように待ち構えてやがる。

「栄ちゃんって知識がどんどん入るから、こっちも教え甲斐があるなあ……そのうちおらの教えることが何もなくなったりして」

「そんなわけないやい、エックスワイゼットなんて毛唐の言葉、今もよくわかんねいもの」

「そげなこと言っつて先生にも大ぼめされたじゃないか。この前の試験なんて栄ちゃんだけが満点で」

いつになく葉が真剣に言うもんだから、耳のあたりがかーっと熱くなってきた。

「よせやい、ガラじゃねいやい」

「よっ！　すごいぞ、栄治兄やん！」

「げっ」

いつのまにかおらたちの居る縁側まで上がりこんできたくそまみれ野郎、いや留までそんなことを言いやがる。

こいつらは何言っつてんだ、いったいおらをどこへ向かわせようっつてんだ。本当にそんなガラじゃねいのに。

「くせいやい、近づくねい、留公め。……ほら、葉。おらのも見てけろ」

押しつけるように帳面を突き出すと、葉は苦笑いしながら赤鉛筆をもう一度取り出した。

「……おらも栄ちゃんに負けねいように勉強しねいとな」
「ん？」

「このまんまじゃ、ほんとに栄ちゃんに教えることがなくなっちゃう」

「ばか言うねい。だいたい、なして勉強なんかにこだわるだ。カジカ釣ったり、山の仕事手伝ったりする方がなんぼか楽しいだ」

葉はしばらくうつむいていたが、はつきりとう言った。

「おら、先生になりたいから。今はまだ夢だけんども、わからねいところがある子どもたちに、きしつとした学問を教えてやりたいだ。だから将来は大学へ行くんだ」

「大学……」

頭がくらくらする。大学というとあれじゃないか、村下の兄やんが首席をとったとかいう、おらたちには全く縁のねいところじゃねいか。

「言つたる、栄ちゃん。これからの時代、身を助くのは学問だ。知ると知らないとは大違い。知らなきゃそのうちとんでもない目にあっちまう。おらはさんざ、満州で身に染みたから……」

「学級文庫にある生活つづりかたみていなもはんを言うんだな。『山奥学校日記』って本だの、『ぼくたちはこうやって生きてる』って本だの、おらたち、こんなにはたらいても貧乏だ、それもこれもこの間の戦争のせいだ、みたいなことばかし書いてある」

「ああ……この前、栄ちゃんが日記の宿題で参考にした本か」

葉のいたずらっぽい視線がちらりとおらの頬をかすめた。

参考にした、と言つたのは葉のやさしさだ。何せ、おら、ほとんど本の内容を丸写しにしちまったんだから。

内容はこうだ。まずおらのおつとうが崖から落ちてけがをする。そこで畑仕事ができなくなったおつとうのかわりに、おらが一所懸命、苦難を乗り越えつつはたらく、というなかなかの文章で、できあがったとき、おら自身が感動して涙ぐんじまったほどだ。これで学級で一番間違いなしと思つたがそううまくはいかなかった。内容は満点間違いなし、と太鼓判を押されたものの、いたずらをしねい栄治の一日なんかあるわけねい、誠実でねい日記だ、と怒られちまったんだ。おかげでダチ公みんなに笑われて、さんざ恥かいた。わるいことはするものでねい。

「ばれてたか」

「当然。おら、あの本読んだことあるからな」

「へえ、なら、おらが最初に葉へ見せたとき言つてくれればよかったのに」

「いい気味、いい気味」

「何をくされごとを言うか、そんな奴はこうだぞ、こう」

ふざけてぶつまねをすると、葉はきゃっきやと言つて逃

げまわった。

「……何にせよ、葉のおかげだっべ」

しみじみとそうつぶやくと葉は不思議そうな顔でおらを見つめた。今では数式を見ればすうっと入ってくる。全部葉が特訓してくれたおかげだ。もしかしたら意外とおら、勉強に向いてるのかもしれない。先生はおらをさんざ、ばか、ばか、と言い、おらもそうだと思っていた。けんども案外勉強もそれなりに楽しいし、やればできるとわかった。それもこれも葉のおかげだ。日本全国の先生が葉みたいな奴だったら、どんなにか勉強がはかどることだろう。

よし、決めた。おら、葉の応援をしよう。そう言うと、葉は目を丸くしてから、なぜだか顔を赤らめていつになく小さな声で「ありがとう、栄ちゃん」と言った。友だちだから当然のことだ。そんな感謝されるいわれはねい。

* * * * *

初午はおいなるのまつりで、村のみんなが楽しみにしている年に一度の大がかりな行事だ。おらは一度も会ったこ

とがねいが、えらい議員の先生が視察にはるばるいらっしやるぐらいだから、そんなじよそこのまつりじゃねい。となり一つ先の村ほどじゃねいが出店もそこそこやるもんだから、おらたちはやく放課後にならねいかと、一日中教室でむずむずすることになる。

いや訂正。落ち着かねいのは朝からだ。

そんな朝に、信心深い葉が「きつね様のまつりだというのに、出店に夢中になってお参りを忘れるなんてばちがあたるだ」と言っけきかないもんだから、むずむずをしずつめるのも兼ねて、ついていくことにした。

「栄ちゃんはきつね様に何をお願いするつもりだか？」

「おらは……」

そう聞かれるまでは、確かに「葉の夢がかないますように、葉が大学へ行けますように」と願うつもりだったんだ。けども、なんだか突然、恥ずかしくなってきた、嘘をついた。

「おらはびん、の白いシャツとパンツと靴下がもらえますように、って願うだ」

「へえ、贅沢だ。おらはな……」

「葉さん。それに栄治君。どうしたの、こんなところで」
葉は葉だ。葉さんなんて気取った言い方、おらは好きじゃない。ずいぶんきざな野郎だと思つて振り返れば、

「に、兄さん……」

そこに立っていたのは、意外なことに村下の兄さんだった。数か月前、村下の家に卵を届けにいったときとおなじ、昔の学生さんみたいな恰好をして腕組みをしている。きつとおらのわからぬいむずかしいことを考へてるにちがいない。かわりあいになつたらいろいろと面倒そうだ。そう思つて葉の腕をこつそりついたら、兄さんはほんとに息でも吸うように、おいなりの賽銭箱から硬貨を何枚か挿んで懐にしまった。

「あつ泥棒」

声に出しちまつてから、少しだけ後悔した。村下の兄さんの目がきゅつとつり上がったんだ。ふつうの人とちがう、恐ろしい目つきに、心の臓が掴まれたようになる。けんどもおら、間違つたことは何も言つてないから、腹に力をこめてにらみかえた。

しばらくにらみあつていたおらたちだったが、やがて兄

さんはゆつくりと口を開いた。

「……栄治君。葉さん。君たちは何に対して祈つてゐるのかい？」

意味がわからぬ。おいなりならそこに居るじゃないか。

「何つて。きつね様にだ」

「きつね様にねえ……ははっこれは面白い」

何がおかしいのか、兄さんは腹を抱えて笑い転げた。むかむかする。兄さんの人を食つたような態度は今にはじまつたことでないが、今日のはゆるしておけぬい……だつておらの横で葉が泣いてゐるんだ。あの芯の強い奴が声も上げず、しずかに涙をこぼしてゐるんだ。

金田のばあさまの言葉がよみがえる——『おつとうがお

つかあが帰つてきますように』金田のばあさま『おらのリウマチが治りますように』

……あの子は自分の事なんか一つも願わぬ、全部他人様のために祈つてゐるだ。あの子は心の底からきれいな子なんだろうな——……友だちを泣かせる奴は、どんな奴でもゆるせぬい。こつそりと、ポケットの中にしまつておいたパチンコを取り出そうとした瞬間、

「君たちはきつね様に対してではなく、権威に対して祈っているんだよ」

兄さんはよくわからないことを言った。

「……けんい？」

「ああ、ごめんね。栄治君には難しかったかな。つまりね、君たちは『きつね様』という昔から存在するだけのいんちきを、自分の頭で考えることもなく、むやみやたらと信じているだけなのさ」

栗の泣き方がいっそう激しくなる。

「そういう権威だとか、とにかく固定観念を壊していくことから、これからの国づくりははじまるんだよ。君たちには難しいだろうけどね。だから僕は賽銭を失敬することで世間から逸脱した。逸脱することから全てははじまるのさ……」

何もかもさっぱり意味がわからぬ。栗のわかりやすい解説と違って、兄さんの話は雲を掴むような現実味の無いものに聞こえる。ただ一つわかるのは、兄さんが自分の言葉に酔っつまってるってだけだ。

「さっぱり意味がわかんない。ともかく賽銭を返せ」

「あーあ、わからないのか。じゃあ見ててご覧」

「何をするだ！」

そのとき、凄惨な音が響いた。裏の小屋に爆弾が落ちたときとおなじくらい心の臓がふるえた。信じられない……なぜって、兄さんはどこに隠し持っていたのか軍刀を取り出し、いきなりおいなりのトタン屋根を叩き割りやがったんだ。

「ばちあたりめ、やめろ！ やめろ！」

「こんなもの、こんなもの、この旧態依然とした村の象徴なんだ。だから壊さないと」

「やめろ馬鹿！」

次の瞬間、おらは無我夢中で、軍刀を振り回す兄さんに飛びついた。青白い顔になった栗が止めようとしているのが目の端をかすめたが止まりようがない。そのまま痩せぎすの身体に拳を喰らわすと、勢いでおらは折り重なるように倒れた。滅茶苦茶に振り回される切っ先を必死で避けながら、おらは兄さんの肺以外の部位に拳を叩きこむ。

「び、貧乏人が僕に触れるな！ 僕は学士だぞ！」

「学があつてそんなことしかできないなら、とんだお笑い

草だつべ！」

「やかましいな、無学者のくせ……」

突然、罵ろうと声を荒げた兄やんの動きが止まった。理由はわからぬ。だがおらは、すかさず軍刀を取り上げ、向こうの林まで蹴り飛ばした。

「ああ……」

兄やんがため息のような声を漏らす。顔色が青白を通り越して、紫に変わっている。どうしたこった。

「権田少佐……どうしてここに……」

兄やんがつぶやいたその先には見慣れないおじさんが立っていた。まるで教科書に出てくるみいな立派ないでたちの紳士で、おらも惚れ惚れしちまうくらいだった。

「もうやめたまえ、村下君」

「僕は……僕は、ただ、新しい国の形を子どもたちに説いてやってただけで」

「違うだろう。君のやったことはただの暴力行為だ。ここは大陸じゃない。君もそろそろ気高い志と青臭い暴力の區別をつけたまえ」

兄やんはしばらく何かをつぶやいていたが、ぱっと立ち

上がり、軍刀を拾うと一目散に逃げていった。ぼうっとへたりこんでいると、権田と名乗った紳士が微笑んだ。あわてておらは立ち上がり、頭を下げた。

「助けてくれてありがとう、おじさん。でも見ていたなら止めてくれよ」

「やあ、ごめん。感心な坊ンズだな。女の子を守るため、身を捨てて武器を持った相手に飛びついていくなんて」

「宜蘭に居た頃、体術を習ってな、だからちいともこわくねいだ」

嘘だ。今もずっと心の臓がばくばくいってふるえてる。けんども、それ以上に葉を傷つけた野郎がゆるせなかったんだ。

「宜蘭……懐かしいな。坊はこの村の子どもか？」

「うん。おらは、夏目栄治っていうんだ。おじさんは？ 村下の兄やんと知り合いみていだけんども」

「わしは権田一戸いちのへ。一時期、村下君の上官をしていてね、彼は大陸で精神をだいぶやられたと聞いていたが……」

権田のおじさんはため息をつき、しばらく何事かを考えていたようだったが、おらに向き直ってこう言った。

「坊ンズ、東京へ来ないか。わしが世話をしてやる」

「ああ。行きていよ。おら、東京に一度も行ったことねいんだ」

おらがそう言うと、おじさんは満足げな笑みを浮かべて去っていった。

「おじさんありがとうな！」

おらがそう叫びながら、おじさんの背中をずうっと見送ったのに、肝心の葉がガラにもなくもじもじして何もしやべらねい。

「……葉？」

心配になってそつと袖を引くと、

「た、助けてくれてありがとうな、栄ちゃん」

ふるえながらも返事がかえってきた。

「礼なら権田のおじさんに言えやい。それにそんなの、ダチだから当たり前だ」

おらの言葉にじつとだまっていた葉だったが、

「……おら、きつね様に『栄ちゃんの願いがかないますように』って願うだ。きつとぴんの白いシャツなんかがもらえるはずだっべ」

そうしていつものように顔をくしゃってして笑った。

ふるえが止まる。ああ、友だちを守れてよかった、心の底からそう感じた途端、おらもやつと笑うことができた。

「今日の出店、どつから回るだか？」

「栄ちゃんのばか、まだきつね様にお参りしてねいべい」

「あはは」

・・*

これで一件落着と思つたんだ。

ところが事態は、おらの思っているのとは違う方向へ転がり出した。

なんでも権田一戸は、となり村に視察へ来ていたらしい議員の先生だったらしい。おら、知らなくてうっかり気安く話しちゃった。

「いやあの子にはなかなか見どころがある。女の子助けるために、頑張つたんだってな」

「肝の据わつたみどころのある奴だ。学つけてえらいきよ、う、じゅにするべい」

いつのまにかそう決まっていたんで、おら、次の日には知らねいうちに夏目の栄治から権田の栄治になっていた。世話をする、ということはそう、いうことだったらしい。事情を知ったときにはあとのまつりで、なしにしてくれ、と頼もうにも聞いてくれねえ。先生じゃなく、先生の親族が聞かねえんだ。先生の息子さんがちようどおらが住んでいた宜蘭で戦死したらしく、おらを息子さんの生まれ変わりだと信じてゆずらねえんだ。年齢も違うし、そもそもそんなの息子さんに失礼だ。けんども聞いてくれねえ。

先生は、びんの白いシャツとパンツと靴下をひと揃え買ってくださったって、そのうち町の学生さんが来ているような立派な服もくださるって約束してください。ああ、きつね様の利益もばかにならねえってことだ。ほんとはそんなものいらねえのに。

おっとうやおっかあは涙を流して、ぺこぺこ腰を折って先生に感謝してたけんども、おら、事情を呑みこみきれなくって、何より葉に申し訳なくって、ガラにもなく山にも川にも出ず、家に引きこもってしまったていた。

「えーいちゃーん」

けんども、葉は何事もなかったかのようにうちに来て、いつものようににっこりと笑ったんだ。こっちはたまったもんじゃない。おらは葉の大学へ行く機会を横から奪っちゃまったようなもんだ。ぬすつとだ。村下の兄やんのような賽銭泥棒よりもタチがわるい、ぬすつとになっちゃった。

「おら……おら……」

「さんざ、たすけてくれたのは栄ちゃんじゃねえの。さ、顔さ上げて、今日も川へ行くつべ」

釣りをしている最中、一度も葉の顔が見れなかった。あれだけ学問の好きな、あれだけ勉強したがっていた葉が、村に残ることになって、まして落第生だったおらが大学へ行くなんて、そんなの神様の不条理だ。村下の兄やんの言うように、きつね野郎はいんちきなのかもしれねえ。おら、一所懸命にお参りしたのに。なしてその場かぎりのどうでもいい嘘をかなえてしまったんだ。

たまらなくなつて、釣りを終えたあと、件のおいなりのところに行つて、さんざんにお宮の戸を蹴りつけた。いくらののしつても、いなりの奴、じつとしているばかりで、ちつとも甲斐がねえ。だから、おら、戸がへっこむまでい

なり野郎をきゆうだんしつづけただ。

でもそれからひどい目にあつた。三日三晩、原因不明の高熱にうなされ、死にかけたんだ。もしかすると本当に、おいなりの、いやきつね様のたたりかもしれない。三途の川なんでものは見えなかつたが、戦争で死んだ兄やんや水害で流されちまつた姉やんと遊ぶ夢を何度も見た。なんといつても誰かがうるさくおらをおぼえている。おらが「あい」と答えているのに、相手は構わず「栄ちゃん栄ちゃん」としつこく呼んできやがる。

「うるせいやい！」

飛び起きたおらが最初に見たのは、おつかあと、そばでくまを作っている葉だった。そうだ。夢でおらを呼んでいたのは葉だったんだ。

おらと目が合うなり、葉は泣き出しそんな不思議な顔でわつと声を上げてから、飛びついてきた。タオルを取り換えにやってきた留がニヤニヤ笑っていたけれど、おら、振りほどくことはどうしてもできなかった。

* * *

権田先生と約束した日になるまで、妙に時間の流れが早くつて、また神様に意地悪されてるんじゃないかとおらは疑つた。

旅立ちのその日は、電線の調子がおかしくつて、いつもはつきり聞こえるラジオがどうもうまくいかねかつた。先生はおらへのせんべつとして、まちのラジオ局に「栄治の好きな『山の子ども』を流してほしい」と頼んでくれた。いたらしく、急に電線がおかしくなつたことをしきりにぶつくさ言つていた。

「なしてだろうな、昨日までは聞こえたのに」

「天狗のせいだねいか。ばあさまはそう言つてただよ」

「そんなわけあるかい」

「だよなあ、そういや留ちゃんは何か言つてたか」

「留ならおらに大きなジネンジョを掘つてくれると言つていたけれども、またうっかり肥溜めに落つちてだんねんしただ」

「留ちゃんは最後まで留ちゃんだなあ」

村のみんなは先に駅まで行つて、おらたちが到着するのを今か今かと待つてゐる。東京へ行くなんてこと、村下の兄やん以来の大騒ぎだから、おらの家に人が入れ替わり立

ち替わりやって来た。……そういえば兄やんはあれから姿を見ない。また家に引きこもっちゃったみていだ。

「あつ……」

葉が指さした先には、だらりと垂れ下がった電線があった。はさみでちよきんとやったみたいに、ふつつりと切れている。

「きつとかわせみの仕業だ。奴ら、くちばしがするどい」

「巢がくせいんだよな」

「おぼえてたか、あのときはほんとにくせいと思った」

「いやな栄ちゃん」

ひとしきりけたけた笑いあつてから、葉は真面目な顔になつてこう言った。

「おらもすぐ追っかけるから……頑張つて、栄ちゃんに追いつくようにするから……それまで元気でいてくれよ」

「……ああ」

目には涙がたまっていた。おらは衛生ハンケチを取り出した。いつかのように乱暴に拭うなんてことはしねい。やさしくふき取つてやつた。

「えらい人になつてね、栄ちゃん」

「おう、なるべい。葉がたらふく卵を食べられる世の中にするんだ」

卵を渡せたのはつい昨日のことだった。気がかりだった約束を、やつと果たすことができて、ほっとした。

「えらい人になつたら、すぐに葉を迎えにくつからよ」
小さい声でそう言うと、葉の頬にぱつと紅がさした。

・・*

駅に到着すると、まず長老をはじめとした村の人々が次々におらへ激励の言葉をかけた。けんども、さつきまでずつと隣に居た葉は、妙に遠慮しておらのそばに寄ろうとしなかった——けんども、おらが東京行き汽車に乗りこんで、笛が鳴る直前、窓を開けて最後の挨拶をするとき、やつと近寄り、妙にかい風呂敷包みを抱え上げて、小さな声でこう言ったんだ。

「弁当。東京へ着くまで栄ちゃんが腹すかさねいように、いっぱい作つた。食べてくんろ」

「けんども」

「昨日から一所懸命作った特製のだからな、きつと食べてくれよ。弁当箱は今度帰つてくるとき、返してくれればいいからな——……」

そこで汽笛が鳴った。

へ赤いくつ アンポイオイ

白いくつ ペイポイオイ

山サル ライソンカウ……

「教えたおぼえのない、宜蘭のうたが聞こえる。葉だ。葉がおらのためにうたつてくれているんだ。千切れそうになるくらい、手を振った。」

・・*

葉の奴、塩と砂糖を間違えたらしい。卵焼き、塩辛くてたまらなかつた。

座席につくと、おらは真つ先に弁当箱を開けた。目に飛びこんできたのは見事な卵焼きだった。

箸でつまみ、口へ放りこむ。

「……………」

月刊缶じうす七月号 通巻200号

2014年6月23日発行

編集人 前崎一成 美倉茉莉

印刷所 広島大学 分団BOX